

傾国の美姫の『影』になりました2

後宮の見習い侍女は、
主人のために暗躍したい

秋月一花 Ichika Akizuki



アルファボリス文庫

序章 新たな知識

今日も、朱亞^{シュア}は早朝にスツキリと目覚める。

後宮で暮らすようになってからまだ日は浅いが、身体はこの後宮に慣れてきたようだと腕を天井に向けて伸ばす。

十五年ほど山奥の村で暮らしていた。最愛の祖父を亡くして旅に出た、翠色^{みどり}の髪と若緑色の瞳を持つ少女——それが朱亞だ。

ふわあ、と一度大きな欠伸^{あくび}をすると、寝台を抜け出して身支度を整える。

（桜綾^{ヨウリ}さん、今日はどのくらいで目を覚ましてくれるかな？）

朝に弱い自身の主^{あるし}——商家の娘として生まれ、紅焰^{コウエン}国の皇帝に見初められた絶世の美女。赤や黄みを含んだ艶のある黒髪と、栗皮色の瞳を持つ、貴妃^{きひ}、胡桜綾^{コウヤウリ}——を思い浮かべ、朱亞は目を細めた。

（だいぶ仕事には慣れてきた……はず）

まさか自分が後宮の侍女として働くことになるとは、と朱亞は視線を窓に移す。ひよんなことから、漆黒^{しっこく}の髪と緋色^{ひいろ}の瞳を持つ、この国の皇帝である楊飛龍^{ヨウフェイロン}と、

彼の護衛である、黄みがかった薄茶色の髪と蒲公英色の瞳を持つ李梓豪と知り合い、朱亞と桜綾は後宮入りすることになった。

朱亞は桜綾の侍女として、桜綾は貴妃として後宮に入り、たくさんの人と出会い、交流した。

村で暮らしていたときは、全員が家族のように温かく朱亞を育ててくれたので、同じ後宮という場所で働く宮女や妃たちと話すのは新鮮だった。

その中でも、飛龍の異母弟でありながら宦官でもある梁爛流は、金糸雀色の髪と瑠璃色の瞳を持つ。顔にはそばすが目立つが、美顔で体格も飛龍や梓豪と比べて細いため性別の判断が難しい。

そんな爛流の幼馴染である、亜麻色の髪を一つにまとめ、藤紫の瞳を持つ女性——徐蘭玲は、爛流に任命されて桜綾の護衛となった。

厨房の尚食で働いている張美友を始めとした宮女たちとも、朱亞が村で教わった知識を通して会話が弾み、打ち解けることができた。

窓の外に広がる空は快晴でまぶしいほどだ。

梓豪にもらった黄色緑柱石の装飾品を襟元につけ、朱亞は自室をあとにした。

この装飾品を身につけていると、ちゃんと背筋を伸ばさなくては、と気合いが入るのだ。

そろそろ桜綾を起こさなくては、と彼女の部屋へ向かう。

中に入れば、案の定まだ桜綾は夢の中にいた。

気持ちよく眠っているところを起こすのは申し訳ないが、今日は桜綾から早起きたいと頼まれているため、心を鬼にして大声を出す。

「胡貴妃！ 朝ですよ！」

何度、桜綾をこうして起こしたことが。蘭玲と一緒に揺り動かしたこともあるが、なかなか目覚めてはくれないのだ。

なんとか起こすことに成功し、ぼんやりとしていた桜綾が数回目を瞬かせ、朱亞を見上げる。

「……平和ねえ……」

ぼつり、とこぼされて朱亞はキョトンとした表情になった。

「平和なのは、よいことではありませんか？」

「まあね。……それにしても、朱亞。最終確認よ？ 本当に調度品はそれだけでいいの？ 陛下のお金だからと遠慮していない？」

朱亞と桜綾が暮らす玲瓏宮。二人の部屋にはほぼなにもなく、桜綾の実家である胡商会で調度品を購入予定だ。

昨日のうちに商品名に赤丸をつけ、桜綾に見せていた。その商品目録は桜綾の寝台

の上にあり、彼女はそれを手にするとバラリと捲る。

朱亞が選んだものは少なかった。桌子と椅子、それと筆筒の三つだけ。

「遠慮なんて！ これらを購入するお金、私は持っていないせんし……たくさん吟味したんですよ。これらがあれば過ごしやすそうだなって」

なにもない自室に置くなら、必要最低限の家具から揃えたい。

「本当……欲のない選び方をして……」

「必要になったときに買い足せばいいかな、と思ったんです」

質素な暮らしには慣れているし、朱亞自身どれが必要でどれが不要なのかまだわからないのだ。

しかし、暮らしているうちに不便なことが増えれば、桜綾に相談してまた買い足せばいい。今度はきちんと、自分の稼いだお金で。

朱亞がそう伝えると、桜綾は「そうね」と微笑みを浮かべた。そのことにホッとして、彼女が手にしている商品目録をじっと見つめる。

「では、この本は、わたくしがしっかりと預かったわ」

そつと商品目録の表紙を指でなぞり、桜綾は朱亞に顔を向けた。

「そういえば、今日から呪術を教わるのよね？」

朱亞はこくんと首を振り、両手を合わせて瞳をきらめかせる。

「はい！ 梓豪さんが教えてくださるんです」

あの殭屍事件から、すでに数週間が経っていたが、その間にもいろいろあり、秘密基地で梓豪に呪術を学ぶ時間が持てなかった。

ようやく落ち着いてきたので、『そろそろ始めましょうか？』と憫流を通して梓豪に問われ、朱亞は『お願いします』と返事をした。

新しい知識を得られるという高揚感に胸をドキドキと高鳴らせ、朱亞はソワソワしている。

その様子を眺めながら、桜綾はくすつと笑う。

「気をつけて行ってくるのよ」

「ありがとうございます、桜綾さん」

桜綾が寝台から抜け出し、朱亞の肩をトントンと応援するように叩いた。

「それにしても、朱亞の知識には呪術はなかったのね」

意外そうな声だった。朱亞は村で教わった数々を思い浮かべる。

「どちらかと言えば、薬草や食材が主でしたね」
悪鬼や神獣のことも教わっていたが、本当にいるかどうかは半信半疑だった頃が懐かしい。

「朱亞の知識はこの後宮でも評判だものね。わたくしも鼻が高いわ」

桜綾は、自分の鼻を伸ばすように鼻先から指を滑らせる。
朱亞はふふっと明るく笑い声を上げた。

「とりあえず、得られる知識は全部、桜綾さんたちのために使いたいです！」

「本当、朱亞は謙虚でいい子ね……」

桜綾は一度言葉を切り、朱亞の柔らかな頬を突く。

「でも、前にも言った通り、自己犠牲は自己満足なんだからね？」

「ちゃんと理解していますよ……！」

フニフニと柔らかい朱亞の頬を堪能して、桜綾は満足そうに目を細めた。

「さてと、それじゃあ……今日もよろしくね、わたくしの侍女」

「はい、胡貴妃！」

今日も、後宮で過ごす平和な一日が始まる。

その日の夜遅く、朱亞は宦官の服に身を包み、以前教わった「秘密基地」へ足を運ぶ。

重厚そうな見た目と反して、扉を開けるために必要な力は軽い。辺りを見回して誰もいないことを確認すると、朱亞は階段を駆け上がった。

階段の先にいる梓豪が視界に入り、彼に声をかける。

「梓豪さん！ すみません、お待たせしましたか？」

「朱亞さん。いえ、それほど待つてはいませんよ。では、あちらで始めましょうか」
すっと庭園の中央にある東屋（やぐら）を指して、梓豪は朱亞に手を差し伸べる。

朱亞がその手を取ると、梓豪は歩き出した。東屋に向かいながら、彼が口を開く。

「あの、朱亞さん。少しお聞きしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「私に答えられることでしたら、構いませんけれど……」

梓豪はホッとして息を吐き、蒲公英色の瞳を細めて朱亞を眺めた。

「以前、この場所のことを『聖域』とおっしゃっていましたよね。どうしてここがそうだと思うのですか？」

殭屍事件後、爛流と梓豪と一緒にこの場所で話した内容や青火を視たことを思い出し、朱亞はまっすぐに彼を見据えた。

梓豪はこの場所について、自分はなにも感じないことを朱亞に伝えた。

すると、朱亞は意外そうに目を丸くし、自身の胸に手を添えて空気を確かめるように深呼吸を繰り返す。

「……村と、同じなんです。この空気」

「村と？」

「村では、年に一回結界を張るんです。そうすることで外のものに遭あわなくて済むか

らって。村を出て初めて、それが当たり前のことではないと知りました」

朱亜が出会った人たちに聞いた話では、お祭りはあるけれど結界を張り直すことはないということだった。

そもそも結界とは？ と尋ねられ、育った村のことを話すとみんなびっくりして首をかしげていたな、と一人で旅をしていた頃を懐かしむ。

「朱亜さんの暮らしていた村は、謎に包まれていますね。ですが、その知識は本当に素晴らしいと思います」

梓豪はしみじみとこぼす。朱亜はぶんぶんと首を横に振り、軽く頬をかいた。

「私は知っているだけですから」

「その知識で助かった方々を、わたしは見てきましたよ」

桜綾たちと知り合い、桜綾が飛龍の妃として後宮入りするため帝都、紅鏡に移動するまでの道中で助けた人々のことだろう。

訪れた街々で風邪をひいていた人たちを放っておけず、朱亜は自身の知識を使って薬膳を作って配っていた。

（あの風邪も、悪鬼の仕業だったのかな？ 症状がよくなった人たちは元気になっているのかな？）

朱亜が薬膳を渡した人たちのことを思い出して黙り込んでいると、梓豪が足を止め

る。いつの間にか、東屋に着いていた。

「中に入りましょう」

梓豪にうながされて、朱亜はゆっくりと足を踏み入れる。

中には桌子と椅子が置いてあった。誰かが掃除しているのか、埃一つない。

二人は桌子を挟んで向き合うように座り、朱亜はきゅっと自身の指を組んだ。

「……私の知識は、おじいちゃんや村の人たちが与えてくれたものです。みんなは、『困っている人がいたら助けてあげなさい。それがきつと、あなたの力になる』と言ってくれました」

知識を教えていたときの祖父と村人たちの顔を思い出し、朱亜は梓豪を見つめる。自分の知識は、村の人たちからの贈り物だと感じていた。

そのおかげで、人を助けることができるし、こうして後宮で働いている。

「朱亜さんの力になる？」

「そのときは、どういう意味かわからなかったのですが……今ではなんとなく、理解できた気がします」

朗らかな笑顔の朱亜を眺め、梓豪はふっと表情を凝ばせた。

「それは素晴らしいことです。朱亜さんにはそのまま、得意なことを伸ばしてほしいところです。……村では、結界の張り方なども教わったのですか？」

朱亞はふりと首を左右に振って否定する。
梓豪は「ふむ」とうなずき、言葉が続けた。

「わたしの知識は、許老師から授かったものです。その知識を、朱亞さんに教えますね」

「藥草店の……？」

沈黙で肯定された。この紅鏡で藥草店を開いている許玄葉。彼には殭屍の対処法を教えてもらったことがある。

そのおかげで、殭屍と蠱姪の動きを止めることができた。

「わたしが知識を得ても、ろくに扱えませんでした。ですが、朱亞さんなら……」

期待をにじませた梓豪の声色。彼の期待に応えることができるだろうかと一瞬不安がよぎったが、それよりも新しい知識を得たいという好奇心のほうが強い。

「では、呪術に関して、わたしが覚えていることを授けます」

「よろしくお願いします」

互いに頭を下げて、朱亞と梓豪は微笑み合った。

「まず、陛下が悪鬼を倒すことができるのは、焰のおかげだとして存じますか？」

朱亞はゆっくりと首を縦に動かす。

桜綾と初めて出会った日。あの山小屋で狗鵝と遭遇した。その姿が脳裏に浮かび、

ふりと身体を震わせる。

その後は悪鬼に遭うことなく、帝都、紅鏡に着いた。

後宮に入ったあとは、陳瑛笑という皇太后付きの侍女が朱亞にきつく当たってきた。だが、その正体は——蠱姪という九首、九尾、虎の爪を持つ人を食らう悪鬼だった。

朱亞と梓豪はなんとか蠱姪の動きを止め、捕らえることができた。
朱亞は飛龍とともに、後宮の隠し部屋に閉じ込められた蠱姪と会話し、なぜ自分が瑛笑から嫌われているのかという理由を知り、納得した。

朱亞自身も知らなかったが、悪鬼に対抗する力があり、瑛笑はそれを嫌がっていた——と、後宮での生活を振り返り、朱亞は天を仰ぐ。

「そして、朱亞さんには不思議な力があります。瘴気……いえ、闇霧を視ることができること、それを消す……この場合は浄化、が正しいでしょうかね？」

梓豪は顎に手を当てて語った。彼の話はすべて、朱亞がこの後宮で開花させたものだ。

「……あの、梓豪さんはどうやって、悪鬼と戦っていたのですか？」

梓豪は玄葉からもらったお守りのおかげで、悪鬼が視えると話していた。だが、視えるだけでは倒せないのではないかと、首をかしげる。

「陛下の焰の力をお借りしています」

「そんなことが可能なのですか？」

朱亞はびっくりして目を見開き、梓豪はすつと自身の剣を桌子テーブルの上に置いた。

「見ての通り、これはただの剣です。人と戦う場合はこの剣のままで構いませんが、悪鬼が相手になると力不足です。そこで、陛下が『焰の炎を一時的に移せるか試すか』と……」

梓豪の話に耳を傾けていた朱亞は、飛龍と彼のやり取りを想像し、くすりと笑ってしまった。慌てて口元を両手で隠すが、バツチリ梓豪に見られていた。

「試してみたら、あっさりと焰の力が剣に宿り、悪鬼に対抗する術まがを得ました」

「試そうとする陛下もすごいですね……」

朱亞には考えつかなかった方法だったので、両手を顎の下で合わせて感嘆の息を吐く。

「そのおかげでなんとか、こうして生きていますので、やってみるものですね」

トン、と剣の鞘さやを指先で触れる梓豪の表情は、とても優しかった。

「さて、思い出話は語ると尽きないので、さつそく呪術の勉強に入りますか」

「はい、よろしく願います」

朱亞は改めて頭を下げる。梓豪はふつと目を細め、「こちらこそ」と同じように頭を下げる。

梓豪は右手の人差し指と中指を伸ばし、他の指を握った形を朱亞に見せた。

「これを刀印とういんと呼びます。このまま縦四本、横五本の交差する線で宙を切っていく方法で、悪鬼を倒す人もいます」

「えーっと、こうですか？」

朱亞は梓豪の動きを真似してみた。こくりと首を縦に振る梓豪は、ピツと人差し指を立てる。

「ただ切るだけではなく、臨兵闘者皆陣列在前りんびょうとうしやかいじんれつざいぜん、と唱えながら切るのです。これを早九字と言います」

「りん……？ どういう意味でしょう？」

「兵に臨のぞんで闘う者は皆、陣列前に在り……戦闘時は先頭に立ち向かっていくもの、という意味があります」

「闘う、者……」

左手をそつと胸元に置いて深呼吸をし、朱亞は前を見据えて教わった通りに手を動かす。

「臨兵闘者皆陣列在前」

朱亞は一度聞いただけで、その言葉を覚え九字を切った。

梓豪は蒲公英色の瞳を大きく見開き、拍手を送る。

「素晴らしいですね、朱亞さん」

拍手をしながら梓豪は朱亞を褒め、東屋の外へ視線を向ける。

「とりあえず、今日はここまでにしましょう。詰め込み過ぎるのもよくありませんからね」

「わかりました。ありがとうございます」

「いえ。それではこれから週に三日、こうしてここで落ち合いましょう。わたしや朱亞さんがここに来られない場合は、爛流さまに伝言を頼みましょう」

梓豪はにっこりと微笑む。朱亞はこくつと短くうなずくと、それぞれこの「秘密基地」をあとにした。

玲瓏宮の廊下を歩き、自室に戻っている途中、ふと自分に突き刺さる視線を感じて振り返ったが、そこには誰もいなかった……

一章 後宮の調査

翌日。

早朝に目を覚ました朱亞は、ゆっくりと起き上がる。ぐーっと腕を天井に向けて伸ばすと、寝台を抜け出して朝の準備を始めた。

昨夜、朱亞は部屋に戻ると寝間着に着替え、なにも考えずに眠りについた。

初めて教わった呪術で頭の中が埋まり、本当に自分が呪術を扱えるようになるのだろうかと不安を抱いていたが、せっかく梓豪が教えてくれるのだ。

きちんと自分の力にしたいと気合いを入れるため、自分の頬を叩く。

昨夜は寝台に横になった途端、意識を失った。気づけばいつも起きている時間だったので、習慣ってすごいな、と朱亞は他人事のように思った。

「さて、と」

侍女の服に袖を通し、黄色緑柱石の装飾品を首元の襟につける。

自分の荷物の中から鏡を取り出し、曲がっていないかを確認、自室を出ていく。

厨房に向かい、ひょっこりと覗き込んでみると、中にいる宮女たちが「おや」と気

づいてくれた。

そして、おいでとばかりに手招きをする。

「おはよう、朱亞ちゃん」

「おはようございます。いい匂いですね」

「はは、ありがとう。貴妃たちの食事はもう少しで完成するからね。水なら外の井戸から持っていっておくれ。あと、これ食べてごらん。薩其馬^{サチマ}っていうお菓子だよ」

「わあ、ありがとうございます！」

招かれるまま中に入ると、「特別だよ」と片目を閉じて薩其馬の入った袋を差し出された。袋を開けて一つ手にし、ぱくりと口に運ぶ。あまり甘くなくフワフワとした食感で食べやすかった。

噛^かんでいるうちに胡麻^{ゴマ}の風味が口内に広がって、思わず顔が緩^{ゆる}んでしまう。

「おいしいです」

「それはよかった。そんな顔が見られると、作った甲斐があるね」

にこにこ愛想よく笑う宮女。朱亞は「ごちそうさまでした」と笑顔で伝え、厨房の近くにある井戸へ向かった。

井戸水をくみ上げ、桶に水を入れて持ち上げようとすると、ぽんと肩を叩かれる。ビクツと肩を揺らして振り返ると、そこにいたのは蘭玲^{ランレイ}だった。

「おはようございます。蘭玲さん」

「おはよう、朱亞。今日も早いね」

蘭玲は視線を落として、朱亞が運ぼうとした桶を眺めると、ひょいとそれを持ち上げる。

「自分で持ちますよ！」

「水が入っていたら重いでしょ。私、力持ちだから任せて。胡貴妃^{コキ}はまだお休みのようなので、先に使っちゃいましょうね」

「……そうですね」

朱亞の部屋まで、蘭玲は水の入った桶を運んでくれた。

手ぬぐいを取り出して、水に浸けてからぎゅっと絞って顔を拭く。

手ぬぐいはしっかりと絞っても冷たく、頭の芯まで届くようだった。

蘭玲も同じように顔を拭き、二人は目と目を見合わせてふふっと笑い合う。

「では、私は胡貴妃の分の水を用意するね」

「えっと、私は……」

「胡貴妃を起こしてくれる？」

蘭玲はそれだけ言い残して、桶を持って朱亞の部屋をあとにする。その後ろ姿を見送り、朱亞は桜綾^{ヨウリン}を起こすために彼女の部屋の扉を叩いた。が、予想通り、返事は聞

こえない。

扉を開けて中に入り、桜綾がすやすやと眠っている寝台に近づき、ぐつと両手を握りしめて気合を入れ、彼女を起こしにかかった。

「胡貴妃っ！ 朝ですっ！ 起きてくださいっ！」

「んんー……」

目覚める気配のない桜綾を揺すり、起こそうとがんばっているが、彼女はなかなか目を開けない。それでもめげずに揺すり続ける。

桜綾と一緒に過ごした時間は、村で暮らしていた頃よりも短いけれど、彼女が朝に弱いことは身に染みていた。

とはいえ、こんなに朝が弱いとは、出会ったときには思いもしなかった。辛抱強く揺すり続けると、ようやく桜綾の目がうつすらと開く。

「……もうあさ……？」

「はい、朝ですよ、胡貴妃。起きてください、蘭玲さんが水を運んでくれますから」布団にもぐろうとする桜綾の手を慌てて掴み、ぐいつと引つ張った。

しぶしぶ起き上がる彼女を確認し、ほつと息を吐いて手を離す。

それでもまだ、うとうとしていているようで、このまま寝台に倒れ込みそうだ。

「胡貴妃、お水を持って来ましたよ」

「あ、蘭玲さんです！」

朱亜は素早く扉に移動して、蘭玲を招き入れる。

桶を持っていたら開けづらだろうと考えたのだ。朱亜の行動を読んでいたのか、蘭玲は優しいまなざしを彼女に注いでいた。

「……胡貴妃って、本当に朝に弱いのかね……」

「そうみたいです」

ひそひそと顔を寄せ合って内緒話をしている二人を、桜綾はほんやりと眺めていた。ようやく眠気が落ち着いたのか、ゆつくりと寝台を抜け出し、蘭玲に近づく。

「わざわざ持ってきてくれたね。ありがとう。あと、おはよう」

「おはようございます。胡貴妃」

「おはようございます。では、私は朝食をもらってきますね」

朱亜はそのまま桜綾の部屋から出ていった。宮女がいるとはいえ、この後宮に女性が少ない。なので、人数が安定するまでは、自分たちでなんとかしないとけない。

後宮までの旅の途中で皇帝——飛龍^{トウリョウ}に伝えられていたことを思い返しながら、朱亜は厨房まで歩いていく。

用意された朝食をもらって、桜綾の部屋まで運ぶ。今日はこの前、爛流^{カンリウ}に頼まれたことを調査してみようと、頭の中でやることを数えていった。

考え事をしていると、あつという間に厨房に着いた。朱亜が「朝食をいただきに来ました」と声をかけると、桜綾の分が載った托盤を渡される。

「ありがとうございます」

「朱亜ちゃん、今日はこっちで食べるかい？」

朱亜は一瞬迷ったように視線を動かし、「はい」と答えた。

最初の数日は桜綾と一緒に食べていたが、本来なら主人である桜綾と侍女である朱亜と一緒に食べてはいけないのだと気づき、それから別々に食事をするようになった。

蘭玲と朱亜は交互に食事をしに別の場所へ行き、決して桜綾を一人にさせなかった。商家の娘である桜綾が、いきなり貴妃という位になった。そんな彼女を一人にさせるのはどうかと蘭玲と話し合ったのだ。

しつかりと托盤を持ち、自分が仕える桜綾の部屋へ、料理を運ぶ。

「朝食を持って来ました」

朱亜の声に気づき、蘭玲が扉を開けてくれた。中に入って桜綾の前に托盤を置くと、彼女はもう着替え終えていて、すっかりいつもの凛とした姿になっていた。

赤や黄みを含んだ艶のある黒髪をまとめ、栗皮色のややつり目という、誰が見ても口を揃えて絶世の美女だと絶賛する女性——それが玲瓏宮の主、胡桜綾だ。

皇帝である飛龍が自ら迎えに行き、貴妃になることを望んだ女性。

朱亜はひょんなことから彼女と知り合い、侍女になった。

その日のことは、今でも鮮明に思い出せる。

「わざわざ持ってきてくれたのね。ありがとうございます」

「いえ、だって私、侍女ですから」

朱亜は胸を張る。桜綾は一瞬キョトンとして、すぐに「そうね」と目を細めた。

朱亜はまだ侍女の仕事がどんなものか、理解しきっていない。とりあえず雑用をすればいいのかな？ と積極的に行動していた。

「じゃあ、先にいただくわね」

「はい、どうぞ召し上がってください。蘭玲さんも、今のうちにどうぞ。私が胡貴妃の傍にいますので」

「そう？」

蘭玲はちらりと桜綾の反応を確認める。行っているわよ、とばかりに手を振る桜綾を見て、彼女は「またあとで」と桜綾の部屋から出ていく。

ボタンと扉が閉まり、朱亜と桜綾は二人きりになった。

「朱亜、今日の予定は？」

「ええと、胡商会の方がいらっしゃるはずです。爛流さんにそうお聞きしました」

「ええ、やっと注文できるわね、わたくしたちの部屋の調度品！」

桜綾は辺りをぐるりと見回して、ぎゅつと拳を握った。

玲瓏宮は貴妃の宮。だが、桜綾と朱亜の部屋はガランとしていた。そこで、桜綾は商品目録を取り寄せ、自分好みの部屋にしようと朱亜を誘っていたのだ。

自分が選んだ家具が部屋に置かれると想像すると、朱亜の胸はワクワクと高鳴る。「でも、その前に掃除をしないといけませんね。人手が足りないのです、一気に綺麗にできませんが……」

朱亜はしゅんと肩を落とす。玲瓏宮には主である桜綾、侍女である朱亜、護衛である蘭玲の三人しかいない。

じわじわと各部屋を掃除しているが、さすがに全部屋までは手が回っていない。朱亜の予想以上に玲瓏宮は広かった。

「そうなのよねえ。わたくしも掃除、手伝うわ」

「貴妃にそんなことをさせるわけには……！」

ぶんぶんと勢いよく両手を振る朱亜。桜綾はくすりと美しく笑みを浮かべる。

「いいじゃない。ここは人手が足りないのだから。やれることはきちんとしないとね？」

「……貴妃って、のんびり過ごすのが普通なのでは……？」

朱亜は会話をするなかで宮女たちから、妃たちは日々遊んで暮らすのが主だと教わっていた。

なので、桜綾にもそんなふうに通じてほしいと思っていたが、彼女は『いやよ、暇は敵なの』と言って、朱亜たちの仕事を手伝ってくれる。

しかも、その手さばきはテキパキとして、朱亜たちを驚かせた。

「わたくし、商家の娘よ。のんびりするのも嫌いじゃないけれど、やれることは参加したいの」

「そんなもの、ですか？」

朱亜がこてんと首をかしげると、桜綾は「そうよ」と胸を張った。

朱亜と桜綾は一通り玲瓏宮の部屋を確認していた。その結果、たった三人で掃除をするには広すぎるともうなずき合っている。

しかし、すべての部屋を掃除し終わったら、達成感で満たされるだろうとも思い、朱亜はにこにこ笑っていた。

「まあ、でも、朱亜も掃除の前にしっかりご飯を食べないとね」

いつの間にか桜綾の食事が終わっていたようだ。

人手が足りない現在、貴妃とはいえ自分のことは自分ですと言いつつ桜綾は、「厨房に返しに行くわ」と托盤トレイを持って歩き出す。

「胡貴妃、私が運びますっ」

朱亞は慌てて桜綾を追いかけ、桜綾はちらりと視線を彼女に移し、口元の笑みを深めた。

なんと桜綾から托盤トレイを渡してもらい、一緒に厨房まで足を運んだ朱亞は、厨房の人たちが桜綾を目にして急いで挨拶あいさつをする様子を眺める。

「ごちそうさま、おいしかったわ」

「光栄です、胡貴妃」

朱亞に薩其馬を渡してくれた宮女が、照れたように頬を赤く染めて微笑んだ。

やはり、直接言葉をかけられるのは嬉しいらしい。

「それじゃあ、朱亞、あなたは朝食を。わたくしは少し歩くわ」

「えっ、お一人では……」

「平気よ」

朱亞が桜綾に声をかけたが、彼女はひらりと手を振る。視線を朱亞の肩越しに向けてると、満面に笑みを浮かべて口を開いた。

「付き合ってくださいでしょ、爛流さん？」

「え？」

朱亞がくると身体を反転させると、長身の宦官——梁リャン爛流カンルが立っていた。

「爛流さん！」

「おはようございます、みなさん。今日はいい天気ですね」

にこやかに微笑む爛流の言葉で、桜綾は空を見上げて小さくうなずく。

朱亞もつられて視線を移し、雲一つない晴天に目を細める。気持ちも晴れるような青空が広がっていた。

「朱亞さんは朝食がまだでしたら、食べてきてください。胡貴妃の話し相手なら、ぼくに任せて」

柔らかい口調で爛流に朝食を摂ることを勧められた朱亞は、「はい」と短く返事をして厨房内へ入った。

（桜綾さんと爛流さんって、どんな話をするのだろう？）

二人の共通点は、どう考えても飛龍しかない。彼についていろいろ話しているのだらうか、と桜綾に視線を注ぐと、朱亞の視線に気づいた桜綾が軽く手を振る。

軽く頭を下げて、持っていた托盤トレイを宮女に渡す。別の宮女の朝食をもらい、厨房の裏にある部屋まで向かった。

空いている席に座って、さっそく料理を口に運ぶ。他の人たちもいて、割と賑やかだ。

「おや、今からご飯かい？」

「美友さん、おはようございます。はい、今からです！」

朱亞が朝食を摂っていると、尚食で働いている張美友が声をかけてきた。どうやら彼女も今から食べるようで、朱亞の隣に腰を下ろす。

「後宮での生活は、だいぶ慣れた？」

後宮で瑛笑を除いて初めて話した宮女である、美友。彼女は朱亞に会ったとき、『藍沫』と呼んだ。

その名を呼んだのは、美友と朱亞が助けた宮女、それから皇太后の三人だけ。長く後宮にいる宮女や宦官から、ぎよつとしたように目を見開かれることも多かった。

朱亞が『藍沫』ではないと気づくと、『そっくりな人っているのね』としみじみ言われたこともある。

「そうですね。みなさん、とても親切なので……」

こんなにたくさんの人と関わる事がなかった朱亞は、後宮で宮女や宦官と話すようになり、新鮮な気持ちで人と接していた。

「そうかい？ それはよかった」

美友はにと白い歯を見せ、自分も食事を始める。背をしゃんと伸ばして、パクパクとおいしそうに食べている姿は、朱亞の食欲を刺激する。

朱亞もパクパクと料理を食べ進め、すべて平らげてから托盤を持って厨房に戻った。

「そこに置いといて！」

「はい。ごちそうさまでした！」

今日もがんばろう、と両手を握って意気込み、朱亞は掃除道具を置いている小屋へ移動する。

朱亞の目には、黒いもや——闇霧がしつかりと視えた。ゆっくりため息を吐いて、小屋の中に入り箒を握りしめた。

「まずは、この場所からね」

ぼつりとつぶやいて、朱亞は闇霧をサッと箒で掃いて消す。

蜃蜃である瑛笑に視えた闇霧と、この闇霧はまた違う。後宮内にはまだ悪鬼がいるのだらうと朱亞は確信を持っていた。

綺麗になった小屋を眺め、満足そうに朱亞は微笑んだ。

箒を持って玲瓏宮に戻っている途中、蘭玲とばったり会った。

「蘭玲さん！」

「朱亞、ご飯は食べた？」

こくりと肯定すると、蘭玲は「そう」と朱亞が持っている箒に視線を移す。

「これから掃除？」

「今日は胡商会の方がいらつしやるので、気合いを入れて綺麗にしようかな、と」
「そうね。綺麗な部屋のほうが、気持ちいいしね」

蘭玲は「手伝うわ」と掃除道具を置いてある小屋に向かい、すぐに戻ってきた。桜綾と一緒に。

「どうやら桜綾が蘭玲を見かけて、あとを追ったようだ。」

桜綾は爛流と別れて、蘭玲に声をかけてここまで帰ってきたと朱亞に教え、袖を捲^{まく}って細い腕を出す。

「じゃあ、さっそく玲瓏宮の掃除をしましょうか」

「胡貴妃自ら……」

「いいじゃない、この宮にはわたくしちしきないのだから」

上機嫌ではたきをする桜綾。蘭玲は「いいのかなあ……」と小さく言葉を漏らしていたが、すぐに気を取り直してパンツと両手を叩いた。

「では、掃除を始めましょうか」

「がんばってピカピカにします！」

右手を天に突き上げる朱亞を、桜綾と蘭玲が優しいまなざしで眺める。

それから三人は、本日使う部屋をピカピカに掃除した。

玲瓏宮に闇霧はなく、ただ埃が舞っているだけだ。なぜこの場所だけ闇霧が視えな

いのだろうかと疑問を抱くこともあったが、日々を忙しく過ごしていたため、そのことが頭の片隅に追いやられていた。

朱亞たちは玲瓏宮の小さな厨房に移動して、少し休憩することを決めた。使ったことは数度しかないが、ちょっとした憩いの場だ。

「ここで簡単な料理を作れるようになったら、いいわよね」

「そのためには、道具を揃えないといけませんね……」

ここに置いてあったはずの調理道具もほとんど残っていなかったため、桜綾は胡商会でそれらも買うつもりだと朱亞に話した。

「道具が揃ったら、またあの湯を作ってくれる？」

「もちろんです！」

朱亞は妃たちのお茶会后、疲れ切っていた桜綾のために金針菜^{キンシサイ}と鶏肉の湯を作り、彼女に食べさせたことを思い出す。

自分が作った料理を気に入ってくれたのだと、朱亞の心の中がポカポカと温かくなった。

「朱亞は料理も得意なの？」

「得意というか、祖父や村の人から教わりました」

蘭玲は目をパチパチと瞬かせ、頬に手を添える。

「どんなことを教わたったの?」

「そうですね……たとえば、人参にんじんと棗なつめを煎せんじて常食すると貧血にいいとか、茄子なすの生姜しょうが煮は胃腸の弱い方にもいい夏期の料理とか、老人の白髪には黒豆を蒸して日干しすることを二回繰り返して、毎日二回、薄い塩水と一緒によく嚙んで食べるというとか……ですね!」

朱亜は指折り数えながら、教わたったことを口にしていく。それを聞いていた蘭玲と桜綾は感心したように息を吐く。

「相変わらず、すごい知識の量ね」

「食材の組み合わせって、いろいろあるのね……」

桜綾は玲瓏宮の外壁に描かれた桃を目にしたときの、『成熟していない桃には毒がある』という朱亜の言葉を思い出し、顎に人差し指を当てた。

(朱亜が暮らしていた村の人たちは、いったいどれだけの知識を持っていたのかしらね。聞けば聞くほど、謎だわ……)

桜綾は天井を仰ぎながら思考を巡らせる。

悪鬼、薬草、食材……おそらくすべて、朱亜のために授けた知識。

悪鬼に関しては知らない人のほうが多いだろう。

(わたくしも、まだまだ知らないことが多いのね)

桜綾はふると頭を横に振り、これから学んでいけばいいのだと気合いを入れて瞳に炎を宿す。

知識は宝だ。それを上手に使えている朱亜のことを、少し羨うらやましく感じている桜綾は、自分にできることをしっかりと果たそうと心に刻んだ。

まずは、掃除だと張り切って胸を張る。

朱亜たちはそれぞれ、別々の場所を掃除した。巳みの刻に終えて三人で集まり、一息ついていると宦官が来て、「胡商会の方がいらっしゃいました」と声をかけた。

「ありがとうございます。わたくしが出迎えますわ」

「い、いえ……かしこまりました」

につこりと微笑む桜綾を間近で見た宦官は、一気に顔を赤らめて「こちらです」と彼女を案内する。

「朱亜、胡貴妃と一緒に出迎えて。私はお茶の用意をするから」

蘭玲は朱亜に声をかけて、厨房へ向かった。

朱亜は桜綾と宦官を追いかけ、桜綾の少し後ろを歩く。

玲瓏宮の入り口前に、妙齢の女性が背をしゃんと伸ばして立っていた。

「お母さま!」

「えっ!?!」

桜綾はパツと顔を明るくして、その女性に近づく。彼女は桜綾を視界に入れると、すぐに両手を広げる。

「桜綾……いえ、今は胡貴妃だったわね。ますます美しくなって……母としては鼻が高いわ」

愛しそうに桜綾を抱きしめる『母親』の姿。

それを目にして、朱亜は自身の胸元できゅつと手を握る。この感情がどんなものなのかは、よくわからなかった。

母娘が会えてよかったという気持ちと、『母親』がどういう存在なのかという好奇心。それと——ほんの少しの、切なさ。

ざわついた心を落ち着かせるために、朱亜はゆっくりと深呼吸をした。

「あ、彼女が？」

「ええ。わたくしの侍女の朱亜よ。朱亜、こちらはわたくしの母の明林」

「初めまして。手紙をもらってから、ずっと会ってみたいと思っていたのよ」

ふと、後宮に来る途中、桜綾が手紙を書いていたことを思い出す。

その手紙の中に朱亜のことが書かれていたから、明林は友好的な態度なのだろうと考えて、朱亜はにっこりと笑った。

「初めまして。朱亜と申します」

笑顔で挨拶をすると、桜綾が満足そうにうなずいた。明林はそんな朱亜と桜綾を交互に眺めて、頬に手を添える。

「綺麗な髪と瞳ね」

「あ、ありがとうございます」

翠色の髪と、若緑色の瞳を褒められて、朱亜はポツと頬を赤らめた。

自分と同じ髪色を持つ人物が後宮にいたらいいな、と頭に浮かんできた。

その人——『藍洙』と呼ばれていた彼女は、いったいどんな人だったのか。想像を巡らせていると、明林がじつと朱亜を正視していることに気づく。

「どうしました」

「ああ、いえ。これからこの子の……胡貴妃のことをよろしくお願いいたします」

明林は桜綾から離れて、朱亜と向かい合い、頭を下げる。朱亜は慌てて自分も頭を下げた。

「こ、こちらこそ」

声がひっくり返ってしまった。まさか明林から桜綾のことを頼まれるとは思っていなかったのだ。

「ふふ。それじゃあ、どこで話しましょうか？」

「とりあえず、わたくしの部屋に来てちょうだい。見てもらえば、いろいろわかると

思うわ」

桜綾は肩をすくめて、明林を自室へと案内し始める。

不思議そうに桜綾のあとを追った明林だったが、移動した先で「なるほどねえ」と納得してつぶやいていた。

桜綾の部屋をぐるりと見回した明林は、腰に手を添えてスタスタと歩き始める。

その後、明林は朱亜の部屋も確認した。なにもなくガランとした様子に絶句していたが、桜綾の部屋に戻ると、パンツと大きな音を立てて頬の近くで両手を合わせた。

「素晴らしいわね！ 自分の好きなもので揃えられるじゃない！」

声を弾ませる明林。朱亜はばかりりと目を瞬かせ、桜綾は「でしょう？」と頬に手を添える。

「これを見てちょうだい」

桜綾は寝台に置いていた商品目録を手にして、明林に渡す。彼女はそれを受け取ると、ざっと目を通した。

「朱亜が選んだものはこれらよ」

「……物欲のない子ねえ……」

「自分の好きなものが、まだよくわからなくて……」

朱亜は後頭部に手を置き、自身が選んだものを思い浮かべる。

桌子、椅子、筆筒の三つ。

いくら飛龍が金を出すと言っても、商品目録に記された金額には目を剥いた。

（本当にこんな大金を払ってもらっているのかなあ……）

そう思いつつも、必要最低限の家具がなくては、少し生活がしづらい。

吟味して選んだものだから、満足はしている。

「桜綾がほしいものは……まあ、予想通りね。ああ、そうだ。これも持って来たの。あなた、忘れていったでしょ？」

明林はゴソゴソと、懐から腕輪を取り出した。その腕輪を見た途端、桜綾は勢よく明林に顔を向けた。

「持って来てくれたの？」

「ええ。これは桜綾が愛用していたもの」

「……これは、黒水晶ですか？」

艶のある黒くて丸い腕輪に視線を落としながら、朱亜が問う。

「そうよ。……本当に博識なのね」

「祖父たちに教わっただけなので、本物を見るのは初めてです」

明林は桜綾の手首に腕輪をはめた。

桜綾は自身の手首に視線を落とし、そっと腕輪を撫でる。

「どうしてかしらね。なんだかホツとするわ」
「ずっと身につけていたからじゃない？」

朱亞は、そうかも、と納得してうなずく桜綾を眺めた。

普段の凜とした雰囲気桜綾よりも、少し幼く感じるのは母親の前だから？ と首を捻っている、蘭玲がお茶を持って登場した。

桜綾は蘭玲も誘い、胡商会で取り扱っている商品目録の中でほしいものはないかを尋ねると、蘭玲は「うーん」と藤紫色の瞳を細めて、口元に指をかける。

「この扇子が気になりますね」

「あら、お目が高い。こちらはうちの新品ですよ」

明林が嬉々として語り出す。朱亞はその話を聞きながら、こくりとお茶を飲んだ。

後宮に入り、いろんなお茶を飲む機会が増えた。故郷でもお茶はあったが、どちらかと言えば白湯を飲んでいたことが多かった。

話を花を咲かせている桜綾たち。目がきらめいていて、楽しそうだ。

「では、この扇子と……そうですね、この花瓶もお願いできますか？」

「かしこまりました」

朱亞がばんやりと故郷を思い出している間に、どうやら商談がまとまったらしい。

「あ、この花瓶は朱亞の部屋にお願いします」

「……えっ？」

「後宮で働く先輩としての、贈り物よ」

パチン、と片目を閉じる蘭玲。朱亞は目をぱちくりと瞬かせて、その言葉を一瞬遅れて理解した。

「そんな、悪いですよ」

朱亞は遠慮しようとしたが、蘭玲はくすりと微笑みを浮かべて、朱亞の肩に手を置く。

「いいのよ。これからもよろしくね、って意味だから」

「朱亞、受け取ってあげて？」

そのやり取りを見ていた桜綾が、蘭玲に助け舟を出した。朱亞は戸惑いながらも、こくりと首を縦に動かす。

「それじゃあ……朱亞、質問をしてもいいかしら？」

「質問……ですか？」

「ええ。あなたのことを知りたいの。桜綾の侍女だもの、どんな子なのか興味があるの」

明林は愛しそうに桜綾を見つめ、言葉を紡ぐ。

「私で答えられることでしたら……」

どんなことを聞かれるのか、朱亜には想像がつかなかったが、明林は一度お茶を飲んでから、まっすぐに朱亜を見据えた。

「そんなに身構えないで。ただの世間話よ」

口元を隠してくすくすと笑う明林と、「お母さまったら」と呆れた様子の桜綾。
(あ、目元が似ている)

母娘なのだから、似ていて当然だ。だが、こうして間近で観察すると二人の血の繋がりを感ぜられて、不思議な気持ちになった。

「桜綾と出会うまで、どんな生活をしていたの？」

「あ、それはわたくしも気になっていたわ。村の話を聞かせてちょうだい」

桜綾は顎の下で両手を合わせた。蘭玲も興味があるようで朱亜が話し出すことを待っている。

「自給自足の村でしたね。すごく平和でした」

朱亜は村でのことを思い返しながら、目を細めた。

「早朝に起きて、畑仕事をして……あ、お祭りみたいなこともありました」

「お祭り？」

「はい！ 外のものから村を守るために村の人たちが結界を張るんですが、そのときは村のみんなで踊ったり騒いだりして、楽しかったですよ！ 特に、村の女性が踊る

舞は綺麗でした」

星空が広がる頃、村の中央に集まって騒いでいた。その日だけは夜更かしも許されて、翌日寝坊しても怒られなかった。——とはいえ、村のほとんどの人は、いつも通りの時間に起きていたが。

女性たちが舞う姿はとても綺麗で、心が躍った。

「女性たちが舞うときは、音楽もあつて……その中心に『紫釉』というおじいちゃんがいきました。すごく物知りなおじいちゃんなんです！」

村長も頼りにしていたし、祖父もいろいろ相談していた人。

(私が旅立つとき、いろいろ助言をくれたんだよね)

村を離れると宣言し、『お別れ会』をするまでの間、紫釉は朱亜にいろんなことを教え込んだ。

『まあ、朱亜なら大丈夫だとは思うがのう』

教えつつ、ときどきそんなことを言って朱亜を喜ばせた。それももう、遠い過去のように思えるのは、後宮での暮らしが充実しているからだろうか、と朱亜は軽く微笑む。

「朱亜はその人……ううん、村のことが大好きだったのね」

明林に問われ、朱亜は満開の笑顔で答えた。

「とても大切に育てられたって、朱亞を見ているとわかるわ」

「そう、ですか……？」

「ええ。きっとそんな人だから、桜綾も心を開いたのね」

それはどういうことだろう？ と朱亞が首をかしげると、桜綾が「なに言ってるのよ、もう！」と話を遮る。

その顔が真っ赤に染まっていたので、朱亞はますます首をかしげた。

「さて、名残惜しいけれどそろそろ帰らなくては。今日の注文はさっそく手配しますね」

明林は窓の外へ視線を向けると、商品目録を手にして立ち上がる。

「お願いします」

桜綾と明林は互いに微笑み合い、明林は朱亞たちに軽く手を振ってこの部屋を出ていった。

今度は桜綾と蘭玲が送っていくようだ。普段、家族と会えない分、こういうときにたくさん話してほしいなと思いつながら朱亞は自室に戻ろうとして——ふと、なにかが耳に届き、顔を上げる。

玲瓏宮の廊下から見える青空。太陽が高く、そろそろ昼間という時間帯。

——なぜ、そんな時間に清暉宮せいききゅうのほうから青白い光が見えるのか、と朱亞は息を吞

んだ。

「……どうして、ここに……？」

辺りを見回したが、ここには朱亞しかない。青白い光はふらふらと動いている。

まるで、朱亞のことを誘うかのように。

それと同時に視線を感じて、朱亞は何度も周りを確認した。その間にふっと消えてしまったようで、ただ呆然と立つことしかできなかった。

（なんだっただろう？）

どうして自分のものに現れたのかがわからず、朱亞は眉間みけんに皺しわを刻む。

呪術に関しては、まだ習い出したばかりだ。わからないことが多すぎる。

しばらく青白い光が浮いていた場所を凝視していると、桜綾と蘭玲が戻ってきた。

飛龍と爛流を連れて。

「なにかあったのか？」

「実は……」

玲瓏宮の廊下でポツンと立っていた朱亞を訝いぶかしみ、飛龍が問う。朱亞は素直に青白い光のことを話した。

飛龍は興味深そうに緋色の瞳を細めると、「行ってみればいい」と不敵に笑う。

「蘭玲、朱亞さんに同行してください」

「胡貴妃は……」

「ぼくと兄上が守りますから」

蘭玲が桜綾に視線を移すと、彼女は神妙な面持ちでうなずいていた。

「わかりました。朱亞、行きましょう」

「は、はい！」

こうして朱亞と蘭玲は、青白い光が浮かんでいた場所へ向かうことになる。

玲瓏宮から離れて歩いていると、侍女が傘を持ち、傾けている姿が視界に入った。

「あら、朱亞と蘭玲。ごきげんよう」

「こんにちは、肖賢妃^{シヤウケンヒ}」

歩行の邪魔にならないように朱亞と蘭玲は足を止め、頭を下げる。すれ違う前に足を止め、賢妃、肖麗華が話しかけてきた。朱亞と蘭玲も足を止め挨拶をする。

「今日はいい天気ね。宮でのんびり過ごすのもいいけれど、こうして散歩しているとんだか心が晴れるわ」

「そうですね、いい天気だと心が明るくなります」

曇りや雨だと気分も沈んでしまいやすい。

（……そういえば、村を離れて天気がこんなに崩れやすいつて知ったんだよね）

山の天気が変わりやすいとは教わっていたが、『雲隠れの村』でそのことを実感し

た覚えはない。旅に出て、村の結果を抜けた途端雨に降られたのだ。

「そういえば、最近于德妃^{ユトクヒ}と唐淑妃^{タンシヤクヒ}にお会いした？」

「え、いいえ」

「朱亞も？ 実は全然お会いできていないのよね……あ、でも唐淑妃は皇太后陛下にお呼ばれしてるって噂^{うわさ}があるから、元気だとは思っただけ……」

「皇太后陛下が、唐淑妃を？」

朱亞と蘭玲は視線を絡める。そんな噂、聞いたことがない。

飛龍の母である皇太后にも、朱亞は『藍洙』と呼ばれたことがある。

その人に似ているからか、それとも別の理由からか、皇太后はあまり朱亞のことを好きではないようで、辛辣^{しんれつ}な言葉を浴びせられた苦い記憶がよみがえった。

だが、同時に桜綾が朱亞のことを庇^{はば}ってくれた温かな記憶もある。

「……あ、ごめんなさい。皇太后陛下のことは思い出したくないわよね」

失言だった、と麗華は口元を両手で隠す。

「いえ、お気になさらないでください」

苦笑しつつも、朱亞は麗華に軽く手を振った。

「それじゃあ、そろそろ散歩を再開するわ。またね、朱亞、蘭玲」

「はい、散歩を楽しんでくださいね、肖賢妃」

「ええ！」

電華が去っていくのを眺めながら、蘭玲は朱亞の袖を掴む。

「蘭玲さん？」

「皇太后陛下がどうしたの？」

「ああ……あのとき、蘭玲さんはいませんでしたものね」

朱亞はうーん、と迷った。蘭玲に告げたら、きっと優しい彼女は自分のことのように怒ってくれるだろう。

だが、皇太后に対して悪感情を抱かせるのはどうかと考え直し、口を閉ざす。

「ちょっと、いろいろありましたが、気にしていません！」

「……そ、そう……」

結局朱亞は、なにも話さないことを選んだ。気にしていないのも本当だし、人の印象は見方によって変わるものだ。

蘭玲には、自身の目で判断してもらいたい。

朱亞はまた歩き出す。電華と話していたときから——いや、あの青白い光を目撃してから心はざわざわと落ち着きがなく、ふと蠶姪——瑛笑と対峙した記憶が脳裏によみがえり、身体をぶるりと震わせた。

「大丈夫？」

「大丈夫です」

自分に言い聞かせるような声だったが、蘭玲はなにも言わなかった。ただ心配そうにまなざしを朱亞に注ぐばかりだ。

朱亞の記憶を頼りに青白い光の場所へ向かうと、闇霧が鮮明に視え、蘭玲に顔を向ける。

「蘭玲さん、私、箒を持ってきました！」

「朱亞!？」

掃除道具が置いてある小屋まで急ぎ、しっかりと箒を手にした。

戻ろうと振り返ると、蘭玲が朱亞を追いかけてきたようで、ドンツとぶつかってしまった。

「すみません……」

「こちらこそ……」

互いにおつ付たところを手で押さえていると、蘭玲が朱亞に短く尋ねる。

「闇霧ね？」

蘭玲の真剣な面持ちに感化され、朱亞も同じような表情になった。

「はい。消しながら闇霧を辿ろうと思います」

「私には闇霧は視えない……だから、朱亞について行くわ」

凜とした声で言われて、朱亞は瞳をきらめかせた。一人では怖いけれど、二人ならなんとかできるような気がする、と心の中でつぶやき、笑顔でうなずく。

「では、行きましょう！」

朱亞はぎゅっと箒を握りしめる。すると、ぼわっと淡い光が箒に流れ込んでいった。(きつと、これが私の力……)

朱亞は自身の目に映る闇霧を箒で消しながら、後宮を歩く。宮女たちに声をかけられながら。そのたびに立ち止まり、世間話を軽くして再び闇霧を消していく。

「……すつかりと、人気者ね」

「みなさん、気にかけてくださっているだけです」

朱亞は照れたように頬をかき、蘭玲はくすりと鈴が転がるような可憐な笑い声を漏らす。

ふと、蘭玲の後ろでなにかが動いた気がして確認すると、朱亞はぎよつと目を剥いた。

「どうしたの？」

「あれ……」

朱亞が蘭玲の後ろを指す。蘭玲が振り返って朱亞の指先を追うと、青ざめた顔で虚空を見つめている女性がいること、その女性がふらりとよろけてその場に倒れてしま

う場面が視界に入る。

バタツと音がして、朱亞の両肩が跳ね上がる。慌てて倒れた女性のもとへ駆け寄って声をかけたが、返事はない。どうやら気を失っているようだ。

蘭玲も近づいて、青白い顔の女性を目にし、掠れた声を出す。

「……春燕……」

「お知り合いですか？」

「え、ええ。昔馴染みよ」

蘭玲はおろおろと狼狽しつつ、春燕の口元に手をかざす。息をしていることを確かめて、安堵の息を吐いた。

「……なんで、こんなところで倒れたのかしら。どうしよう？」

「とりあえず、部屋で休ませましょう」

朱亞が春燕の脈を確認して蘭玲を見上げると、彼女は「そうね」と春燕のことを抱き上げた。朱亞の部屋まで運んでもらうことにし、玲瓏宮に戻る。

朱亞の部屋に入り、寝台に横たわらせて、そつと彼女の額に手を添え、熱がないことに朱亞は胸を撫で下ろした。

「この方、視える人みたいですね」

「朱亞と同じものが？」

こくりと首を縦に動かす朱亞。まさか、こんな白昼から視ることになるとは思わなかった。

そのことに多少動揺したが、すぐに気を取り直し、春燕に毛布をかける。
「爛流さんと梓豪さんも、視えるみたいです」

「……？ どうして知っているの？」

不思議そうに問われ、朱亞は昨夜のことを簡単に説明した。

蘭玲は目を丸くして、朱亞と春燕を交互に眺め、自分の目元を手のひらで覆う。

「……本当にいるのね、視える人」

「……蘭玲さんは悪鬼の姿が視えない……のですよね？」

蘭玲は口を閉ざした。

沈黙は肯定だと教わっていた朱亞は、ちらりと蘭玲の様子を窺う。

「視える人のほうが、稀じゃないかな……？」

今度は朱亞が黙り込んだ。

狗鶚のことは桜綾も視えていたようだが、それとはまた違うのだろうかと思ひ、頭を左右に振る。――力の強い悪鬼は視えやすいのかもしれない、と。

「悪鬼のことは爛流さまに教わって、知識だけあるのだけど……私には視る才能は皆無みたいなの」

殭屍は人間の死体だから、蘭玲の目にもしっかりと映っていたのだろうか、と朱亞が考えていると、蘭玲は寝台に横たわっている春燕の頬に手を添えた。

「……もっと、話を聞いておけば、よかった」

蘭玲は懺悔のような声を落とす。

肩を震わせている蘭玲になにを言えばいいのかわからず、ただその様子を眺めることしかできなかった。

「相談を、受けていたのですか？」

「……どちらかと言えば、独り言に近かった、かな」

春燕の頬から手を離し、きゅっと拳を握る蘭玲。朱亞はそっと彼女の手に自身の手を重ねる。

朱亞の体温が伝わり、蘭玲は涙で潤んだ瞳を朱亞に向けた。今にも大きな雫がこぼれ落ちそうな表情だった。

それだけ、春燕のことが心配なのだろうと、朱亞は視線を彼女に移す。

「この世のものではないものが視える、怖い……と。でも、私は視えないから、そんなものどこにいるのさ、と話していたの」

蘭玲は淡々とした口調で紡いでいき、固く目を閉じた。朱亞は相槌を打ちながら、彼女の話を耳を傾ける。